（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　中澤　佳陽子

本論文で取り上げられたロシアの作家フセヴォロド・イヴァーノフ（1895–1963）は，ソ連時代初期の 1920 年代に，サンクト・ペテルブルグで結成された文学グループ「セラピオン兄弟」の一員となり，当時流行していた「装飾的散文」の代表的作家として名声を獲得した。しかし，その後のイヴァーノフにはめぼしい創作活動がなく，半ば忘れられた存在となっていたが，没後の 1980 年代以降，生前には政治的理由により未刊のままとなっていた優れた二つの実験的長編小説『クレムリン』（1930），『ウ』（1932–1933）の存在が明らかになり，次々に刊行されるに至った。中澤氏は本論文において，主にこれらの作品におけるイメージの分析を手がかりとして，この作家の従来よく知られていなかった初期とは異なる作家像を明らかにしようとした。

序章においては両作品の成立過程および先行研究の検討が簡潔的確になされ，次に，両作品が技法上多くの共通点を持つこと，および，初期とは異なり，思想的・哲学的傾向の深化が見られることの立証が，本論文の主な課題であるとされる。続く第 1 章および第 2 章では，初期作品と両長編をつなぐ意味を持つ短編集『秘中の秘』（1927）が特に取り上げられる。初期作品との主要な相違点として，人間の心理・無意識を扱うという意味での作風の転換，その際の手法としての「象徴」の採用，個人主義とそれを克服する「新しい人間」というテーマの登場があげられ，そこに当時広く読まれていたフロイト，ベルクソン，ロシアのヴラジーミル・ソロヴィヨフ，フョードロフの思想的影響を見ようとしている。

続く第 3 章では以上の論点をもとに『クレムリン』における 2 種類の紋章に表されている「騎士」のイメージが多角的に分析され，個人主義とそれを超克しようとする「新しい人間」というテーマが見出されるという主張がなされる。『ウ』を論じた第 4 章，第 5 章でも，2 種類の王冠のイメージ，2 種類の衣服のイメージがそれぞれ綿密周到に分析され，そこに同様のテーマが表現されていると同時に，当時ゴーリキイ等が提唱していた芸術の「集団的創造」の理念が扱われていると指摘される。

審査では，ほぼ信頼に値する刊本がまだ 10 数年の歴史しか持たず，先行研究が非常に少ないうえに，テキスト読解上の問題も多く残る作品を対象として，幅広く周到な基礎調査を粘り強く行った点と，1920 年代のロシアの思想状況の的確な理解を有効な補助線として活用し，両作品の一見「不可解な」作品構成および細部に関して非常に説得的な解釈を与えた点が高く評価された。他方，当時の文学的状況に関する目配りがやや不足しており，イメージの分析に集中するあまり作品の全体的な理念の把握にも不満がある等の批判もなされたが，本論文がもたらした多大な功績は審査委員会が一致して認めるところであった。

以上により，本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位授与に値するものとの結論に達した。